慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	關山直太郎編著『初期□會主義資料』：牟婁新報抄錄
Sub Title	Naotaro Sekiyama (ed.) : "Some documents on the socialism in the Meiji era"
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1960
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.33, No.3 (1960. 3) ,p.96- 99
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19600315-0096

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

關山直太郎編著『初期社會主義資料』

――牟婁新報抄錄――

一　和歌山縣の片隅、田邊町（現在は市）で發行された一地方新聞『牟婁新報』が近代日本史研究の上でとりあげられるようになつたのはごく最近のことである。

『日本近代佛教史研究』（吉川弘文館、昭和三十四年三月）の著者吉田久一助教授はその著の第六章第三節において『牟婁新報』と社會主義者グループとの關係を論じられたが、これにより一躍『牟婁新報』の存在とそれのもつ重要性が世に明らかにされた。吉田助教授はその書のなかで「『牟婁新報』の記者で、社會主義者であつた者は五名に達する。小田野聲・豐田孤寒・荒畑寒村・管野幽月・大石誠之助である。『牟婁』の社會主義論説について紹介されたことがないし、平民社落城後、日本社會主義運動史に一つの役割を持つていると思うから解説してみよう」（五一六頁）といい、「平民社落城後の社會運動にとって、『牟婁』がかすかな希望の一つであつたといつてもよい」（同上）とされて地方に埋もれていた『牟婁新報』を初めて紹介された。

吉田助教授から『牟婁新報』の所在とそれに關係した人々、そこで主張されている社會主義論説、幸德事件との關係について明らかにされたとき、われわれはこれが何とかわれわれの共有財産にならないものかと切望したものであつた。貴重な『牟婁新報』は和歌山大學の關山直太郎教授の手で、同大學經濟學部の所藏に歸したことも吉田助教授の書中で知つた。

われわれの希望は意外に早くかなえられる日がきた。關山教授は『初期社會主義資料――牟婁新報抄錄――』を公刊されて埋もれていた寶庫をわれわれの前に公開して下さつたのである。

二　本書は明治三十四年から明治四十五年までに『牟婁新報』に掲載されたもののなかから、とくに社會主義的色彩の濃厚なものを採錄したものであるが、さらに數葉の口繪、索引、不採錄主要項目、解説までつけ加えられてあつてわれわれの研究に一層の便利をあたえてくれる。

『牟婁新報』の歴史とその位置づけおよびここに收錄されたものの意義については關山教授の十七頁におよぶ「解説」のなかにすべ

てが詳述されていてこれにつけ加えるべきものは何一つないとさえ思える。そこでここでは筆者が特に感じた點二、三について書き留めることにする。

『牟婁新報』は明治三十三年四月に發刊され、昭和六年三月までつづいたようである。同紙が何らかの意味で社會主義との關係をもつものとして世に知られてきたのは明治三十七、八年頃からで、その前後數年が同紙の社會主義的色調の一番濃い時代であったという。本書は、さきにもふれたようにこの時代に基準をおいて明治三十四年から同四十五年までのものの中から收錄されている。論說、記事、感想、詩文、消息のうち多少とも社會主義に關するもの、あるいは社會主義的志向のもの、もしくはこれと同調するような、いわば當時としては進步的な傾向を示すものを主として採錄し、また直接右のような傾向を示さなくとも、社會主義者あるいはその同調者もしくは親緣者の論文や隨筆類、さらにはこれらの人々の傳記材料として幾分でも寄與しそうなものを收錄したという。

『牟婁新報』は社會主義を宣傳普及するのが目的でなく、あくまでも一地方紙であり商業新聞であった。荒畑寒村が「退社の辭」(一五九頁)でいっているように、その論壇において社會主義をいかに鼓吹しても、三面記事においては姦通、窃盜、强盜、放火、自殺等々の筆をとらなくてはならなかった。社會主義者の機關誌『平民新聞』、『直言』、『光』には同系の友紙として『牟婁新報』はしばしば紹介されたが、社會主義の機關紙そのものではなかった。

しかしながら小田頼造、豐田孤寒、荒畑寒村、管野須賀子がその記者として社會主義の宣傳をし、大石誠之助、成石平四郎がさかんに寄稿し、堺利彦、幸德秋水、木下尙江の名前も見える同紙はたしかに『平民新聞』その他の友紙であった。小田、荒畑、管野が同紙の記者として赴任しえたのも堺利彦の紹介によるのであった。

小田は明治三十七年三月に田邊に來任し、ただちに三ヵ月にわたる「新時代の警鐘」なる長論文を書きはじめたが、平民社における小田は幸德、堺、木下、安部らの大先輩の陰にかくれてその存在すらかすんでいた。平民社の名物傳道行商をはじめたのが小田であり、彼は初めて千葉縣下に傳道行商をこころみてまもなく堺によびよせられ、行商中途で田邊へ赴任したのである。荒畑にしても平民社時代は小田とまったく同じく横濱曙會の有力メンバーとして、また東北地方傳道行商を試みた者としてはしられていたが、中央で筆を振るほどではなかった。管野須賀子にいたっては地方通信のなかに二、三回みえる程度でその存在は小田、荒畑とは比較にならぬほど輕い存在である。

石川三四郎、西川光二郎らの平民社入社の辭と比較して小田の『牟婁新報』への「入社の辭」(二〇頁)は何と壯大なひびきをもつ

ていることか。こんな點にもうかがえるように小田、荒畑、管野そして豐田といつた青年社會主義者には『牟婁新報』は未熟ながらも自己の力を十二分に發揮できる新天地であつた。こうした若い主義者の練成の場であつたことは注意されてよい。

このことと關連してこれら右の四人の青年社會主義者、さらに大石、成石ら幸德事件の犠牲者のこの期の活動と思想がかなりあきらかにされたことは何といつても喜ばしい。さらに私見をさしはさむことを許されるならば、赤旗事件以後幸德事件にいたるまでの社會主義者のなかで管野須賀子の占める位置が低く評價されていすぎるのではないかと思う。やがて幸德事件五十周年をむかえ、各種の出版やら行事が企畫されているが、その中心に幸德一人だけがおかれている。事件の事實上の推進者は管野であつたと筆者は信ずるが、彼女の研究はほとんどなされていない。管野にたいする評價の低い一つの理由は資料の乏しさにもよるのだと思う。その意味で彼女の『牟婁新報』時代の資料がかくも大量に明らかにされたことは本格的な管野研究への道を開くものといつてよいだろう。

『牟婁新報』の社會主義的主張と中央の社會主義者の主張とのあいだでもつとも大きい、ほとんど唯一といつてよいほどの相違點は戰爭にたいする態度である。主筆（時には社長でもあつた）の柴庵毛利清雅は新佛教派に屬し、かならずしも、社會主義者とはいえないが、佛教の極致は社會主義の理想社會と一致すると考えていた。その點で彼のいう所は社會主義者の考えと多く共通し、關山教授の言葉をもつてすれば柴庵の思想は「佛教社會主義」ともいえるものであつた。この柴庵は日露戰爭に反對しないという點で、いや積極的にこの戰爭を支持したという點で幸德・堺らの立場とは異なつていた。「牟婁新報の先生方は先きには提燈行列の隊長となり、今は社會主義演說會を開いて平和を唱へつゝあり、新聞記者も中か〳〵多忙なる哉」という讀者の投稿にたいして「征露戰爭は我國の權利なり、予等は斷じて此戰爭に與みせざる能はず、祝捷行列の如き蓋し軍國民の感情を表出すべき唯一の方法なるべし、故に予等は行列の隊長たるを辭せず、然れども之れと同時に社會の貧者弱者を救濟すべき大任あるを思ふ。社會問題演說會の如きは則ち之れが爲めに開かるべし、而うして多忙は人間の義務なりと予は思惟す」（「投書函」六五頁）と社の態度について答えているが、これは柴庵の筆になつたものであろう。「柴庵君足下、君は主戰論者だと言はれたが僕も決して非戰論者ではないよ」（「編輯局へ」二三四頁）という大石誠之助（祿亭）の言葉や「牟婁新報記者には社會主義者もあり、然れども新報の主張は日露戰爭を以て當然開始せらる可きものと認め盛んに戰爭を主張したるなり、故に牟婁新報を讀まば社會主義を學び得可し、軍閥の壯烈にも接觸し得可し、非戰論者も戰爭論者も

共に通讀せらるべし、而うして吾社の主張は此中に自ら一道の清流となつて發露しつつあると認め得可し」（「投書函」二五八頁）という社の態度の表明の中にも社會主義を主張しながら平民社系の社會主義者と異なり反戰ではなかつたという複雜な點がわかる。

中央における社會主義者の活動と思想はこれまでにかなり究められてきた。これからの課題は中央と地方とのつながりや、地方における運動の展開過程であろう。本書は明治三十年代中頃から明治の終りまでに亙る一地方の社會主義者の活動とその思想の滲透の度合を研究する上に缺くべからざる資料を提供するものである。關山教授の勞に深甚なる感謝をする次第である。（吉川弘文館　六三〇圓）

（中村勝範）

T. F. T. Plucknett: Early English Legal Literature

London: Cambridge University Press. 1958. 114pp. 18 s. 6 d.

プラクネット著

『英法初期の文献』

プラクネット Plucknett は、現在ロンドン大學において、法制史の講座を擔當する教授である。一九五〇年、彼は、有名な法制史學者、メイトランド F. W. Maitland の生誕百年を記念し、ケムブリッヂ大學・メイトランド記念財團 F. W. Maitland Memorial Fund の主催した、記念講演に講師として招かれ、六日間にわたり、講演した。ここに紹介する著作は、この際行われた、六つの演說を、一冊の本にまとめて刊行したものである。なお、本書の冒頭に掲げられた「メイトランドの法および歷史に關する見解」と題する一文は、既に、Law Quarterly Review 誌上に、發表をみているが、他の五つの論文は、いずれも、今回始めて公刊された、斬新な文章である。

I 「メイトランドの法および歷史に關する見解」と題する一章において、プラクネットは、まず、偉大な法制史學者、メイトランドの、不朽の作品を、現代の立場から、再評價することから始めている。

中世英國の莊園に關する研究において、メイトランドは、所謂、古典學派の始祖の一人として、ユニイクな立場を築き上げることに成功した。しかし、近年、彼を中心とするいわゆる古典學派の立論は、新しい史實の考證に基づき、コスミンスキ E. A. Косминский, ポスタン M. M. Postan といつた學者達により、强く批判されるに至つた。この事實は、メイトランドの作品の學問的價値を、いさ